

「それ地引だよ、起きよ、起きよ。」私は子供達をよんだ。みんなはむつくりと起き上つた。

皆は跣足のまゝ表に飛びだした。朝の砂地はひんやり冷たい。日はまだ出ない。

濱に行くと、船は筵旗をたて、もう海に出る用意をしてゐる。子供達は喜んで、船の舳の繩を引いた砂地の上を船はする／＼と海にはいつた。

浪は荒かつた。

裸體の船夫は、勇ましく櫓を操る。船は浪を切つてすゝむ。血のやうな朝の太陽を浴びた舟夫の勇しい風貌よ！やがて船は浪切つて網を下してゆく。

朝飯をしまつて、出て見たときにはもう廣い濱邊には、五組も六組も地引が初まつてゐた。

「おやあ、おやあ………」

老人も若者も女も男も、地引の繩を腰にかけて「おやあ、おやあ」で引いてゐる。私達もその仲間に入つて「おやあ、おやあ………」で引くのであつた。潮流がつよいので引いてゐる中に、網がぐん／＼西へ流されて行く。若者が海へとび込んで網をもつ……仲々の騒ぎだ。

その中に網が上りだした。網には若布や荒布なんか引ついて上つてくる。とうとう大きな網袋が砂の淺瀬に引き揚げられる。鰹や鱈がびん／＼跳ねてゐる。大きなタモでそれをすくつては砂の上に揚げる砂の上には時ならぬ銀鱗の山をさづく……あじ、いわし、ふか、ふぐ、かに、ひらめ、しまだい、たちうを、きす、たい、あかえい、えび、ぐみなまこ……いろんなものがはねまわつてゐる。

私は手拭のなかにたくさん魚を貰つて、家にかへつた。歸つてから貰つた魚を寫生をしたり、地引の綴方を書いたりした。晝食のお菜は貰つたお肴だつた。

◇地引網引き

第四篇 子供の生活記録







村の「夏の學校」には毎日二回鬚むしやの郵便さんが楽しい手紙や小包を置いて行つた。皆は郵便の小父さんを待つた。手紙が来ると、みんなは返事をかいた。又珍らしい出来ごととは、一々手紙に書いて家へ知らせた。いい綴方の學習だつた。

◇  
お父さん、お母さん、おかしがつきました。どうもありがたう。僕は只いぶん丈夫です。かあ様、お父さまは丈夫ですか。僕はからだのかわがだいぶんはげました。僕はおみやげをたくさんもつてかへりませう。この手紙はていしやばからだしたのです。銚子に行くときかいたのです。手紙をかいたえきは松尾えきです。今日は銚子でしようゆの工場と、とうだいを見るはずです。四(三年 三島 正六)

手紙のほかに、日記もかきつけて来ました。しかし、日記は遊びにまぎれて、書かないであとした日も随分あつたやうでした。

#### □ 赤えいのお産

朝、昌ちやんと、武井君と私と三人で地引を見に行つた。もう網は上つてゐた。鯨は砂の上に山積されてピンピン跳ねてゐた。人垣の間から私達もその鯨を見てゐた。と、すぐ後から

「赤えいがお産してをるは！」といふ聲がした。子供達は勿論大人もその赤えいの方へ行つた。行つて見るとそこには四貫目位と思はれる大赤えいが白い腹を上にして砂の上に置かれてアップ／＼してゐる。朝網にかゝつたものだ。見てゐると、水でも流れたすやうに赤えいの子が生れてゐる。大きな子だ。

「取り上げてやろつべ」鬚むしやのまはだかの小父さんが、猪い蹠で赤えいの腹を撫でかけると、

「あらかわいいじやないの」と或る漁夫の主婦さんが云つた。「さうだなあ」と男はおとなしく云つてその大きな手で赤えいのお腹をさするのであつた。赤えいの子は五匹、六匹、七匹、八匹……次々に生れる。

「あや又……」とみんな珍らしさうに、その都度云つた。親えいの身體のまわりにはぬめ／＼した赤えいの子が重なりあつてゐた。数へて見るとえいの子は十九匹ゐた。

「もう一匹生位むべえ」男は尙腹を撫でたがもう赤えいは生まれなかつた。



やがて親えいはぐつたり動かなくなつてしまつた子えいは親えいの運命は知らないやうに、尾鰭を弓のやうに張つて、重なり合つて蠢めいてゐた。

「子供達！ 生かしてやれよ」例の小父さんが云つた。すると、子供達は糸のやうな尾つぼを釣り下げて海の方へ走つた。

昌ちやんがそれを見て云つた。

「あれが大きくなると、又とられるのね。そしてたくさん子を生むのね。子を生むと又生かすのね。生かすと又たくさん子を生むのね……」

#### □夜の會雜記

x

「青い鳥」のミチルになつた武井君「僕は劇をやるのが一等すき……」

小野君「僕は劇を見るのが一等すき。」

x

妖女になつた杉さん「私は表情よりも感じで出すのよ。」

x

「青い鳥は何回やつても面白いね」チルチルになつた福澤君が云つてゐた。

さうだ、仕事は何回同じくくり返されても生命がその中に生長する實感さへあれば喜びがある。生命生長の實感自由創造の境地から生れる。

青い鳥は三回に亘つて子供達の手によつて實演された。全く熱中してゐた。

#### □ホラ吹き會

夜は「大きな提灯小さな提灯」をやつたり「雷」をやつたりした。「後つけ」遊びがいつの間にか、ほらふき會になつてゐたのもおもしろかつた。

□

A お父さんとお母さんが生れたので、僕は産婆さん呼びに行つた。木につまづいたら、産婆さんの所へ行くことを忘れて、そこで遊んでゐた。すると姉さんが、



「早く行つてらつしやい」と云つたから「さうだつた」と思ひ出し、やがて出かけた。

B 天の川へ私は行つた。そこに産婆さんがゐるからだ。そこには七つ首のある大熊と小熊がゐたので天の川の水を汲んでやるこ、産婆さんの居場を知らせてくれた。

C 産婆さんをつれてかへると、お父さんとお母さんは赤ん坊になつて泣いてゐた。お乳はいくらでものんだ。そしておしつこをいくらでもした。そのおしつこが日光の瀧だ。

□

或日、お月さんがおつこちてゐたので、メスで解剖をして研究して學校へもつて行つたら大へんほめられた。

□は まぐり

三島君が、或日、

「先生ね、はまぐりは、濱にあつて栗のやうだから濱ぐりつて云ふのね……」

ひとり眞理を發見したやうに、にこにこしてさう云ふのであつた。

□お や つ

三時頃になると、

「先生おやつおくれ！」と誰かど忘れないでゐて請求したものだ。

その都度、炊事の世話係の平田さんと金田さんが、にこ／＼しながら、用意されたものを大皿に盛つてもち出されたりした。

「いただきます」子供達は水泳でお腹がすくのでよろこんで食べた。

あやつは、唐黍、ようかん、ばん、西瓜、くず湯、まくわ瓜、おしるこ、お菓子……いろいろなものが次々にかわつて行つた。

大人の私達もおやつをいたゞいて、子供らしい氣持になつてたべたものだ。

□お化のお話

寢床につくと、毎夜、お話を二つ三つきかなければ、子供は承知しなかつた。志垣さん



がおかへりになつてから、第一宿舍では私と野村訓導とが交番にお話をした。お話も多くはお化のお話だつた。私のしたお化の話は次のやうなものだつた。

□猫の妖怪——(水野葉舟氏のもの)

□浮島——(山形縣の大沼山の話)

□たぬきのお化——(鳥取の郷土のお話)

□慶藏坊——(鳥取城の狐のお話)

□青い服を着た悪魔——(アンデルセン)

□ぼた餅のお化——(橋南溪の西遊記)

こんなお話に示唆されてか、或日、便所でお化が出るとて、子供達、大騒をやりだした。便所に行つて見るとなるほどお化が出てゐる。西洋半紙にかゝれた齒をむきだしたお化だ。野口君が角と顔と口とをかき、三島君が鼻と目をかき、伊美先生が齒を書いて出来上つたお化だつた。それを野口君がピンではつたのださうだ。

お化さわざで、便所にゆくのが恐しくなつたものもあつたとかで、便所が汚れだし、やがて誰かの手によつて、お化は退治されたのだつた。

x

夜の會で、早川君が創作しつゝ話した「森のお化」といふお話——

「蓮沼村にアラマクシロといふ人がゐました。その男が森のお化退治に行つた。そのお化は大きいお化だが、小さくなつたりしてゐることもあつた。或る日森の家の臺所の七輪になつて、お化は晝寝してゐた。そこでアラマクシロは大きな團扇をもつて来て、七輪をあふぎたてました。大きい七輪が次第に小さくなりました。小さくなつたから、アラマクシロはその團扇の技で七輪をこわしました。お化はギアと云つて倒れました。」

お化の頭からは、食べられた人間が八千五百三十七人出ました。」

#### □銚子行き

建ち並んだ山サ醤油庫の屋根の美しさ。庫の中には大きな醤油の仕込桶が幾本も幾本も立ち並んでゐた。私達は冷っこいをしめやかな醤油の香をかきながら、桶と桶との間のせまい道を、枝師の人について歩いた。



いくら歩いても仕込桶はつゞいた。ここのみは流石に静かだ。特異な日本の情調が動いてゐると思つた。

仕込庫を出ると醤油の搾取場があり、詰場があり、樽工場があつて、たくさん男女が働いてゐる。しかしその働らきに何處かに静けさと、清らかさがあるやうだつた。

詰場の新らしい樽の香と、樽工場の槌の音とはいいものだつた。

詰場で樽に醤油のつまるのを、樽のかがみを小さな槌で叩きながら、詰つた程度を加減して栓をしてゐたのもあもしろかつた。槌の音と共に仕事はたのしく流れて行く。カーベンターあたりの云ふ労働の藝術化といつたやうなことが思はれる。

◇醤油詰り場

叩け叩けよ

ほんほこほん

銚子お醤油日本一

こここの詰場はお屋根がたかい。

叩け叩けよ

ほんほこほん

叩きや木の香も醤油にこもる

今日も千樽まだ日は高い

叩け叩けよ

ほんほこほん

主はお船頭わしや樽叩き

俺が叩かにやお舟は出ぬ。

叩け叩けよ

ほんほこほん

x

犬吠岬の松の青さよ。

犬吠岬の海の廣さよ、波の白さよ。

何か知らざらく光るものが、あたりに一たいに動いてゐた。

九十尺の白い燈臺は岬頭に聳えてゐた。赤い信號旗が日に閃めてゐた。

第四篇 子供の生活記録



軍艦が海を走り、白帆がいくつもきら／＼輝いてゐた。

□お 別 れ

「もつとゐたいな。」

みんなは言つた。二週間といつてもたつて見ると案外短かいやうに思はれた。

その日は朝の四時から起きて荷造りをした。村の古作先生なども、早くきて手傳つて下さつた。荷物を大きな馬車に積んでしまつて、皆は庭におりたつた。村の人達も別れをさしむやうに、見送つてくれた。私達は知らない村の人達へも一々別れの挨拶をしたい氣持になつてゐた。

「又、來年もあいでなさい。」炊事のお婆さんが云つた。

「蓮沼村よ、さよならなら。」

皆は自動車にのつた。

古作先生のお母さんは自動車ののり場まで赤らやんをおぶつて見送つて下さつた。

「おばさん、さようなら………」

「又、來年もいらつしやう。」

ここでも、又この言葉がくり返された。

雨がぼつ／＼降りだした。

成田でうまく晴れてくれ／＼ばいいが。

□成 田 に て

成田不動様でのいい印象二つ。鳩と、お堂の後の坊さんの彫刻――

鳩が人の肩や頭に平氣でのぼつて、豆を食べてゐる。子供はよろこんで豆をやつた。伊

美先生の白い服には鳩の可愛い足跡が點々とついてゐた。

お堂の彫刻は、何百人かの坊さんが、ほられてゐるのだ。その顔と姿を次々に見てゐると、面白くて何時までも見ていたい。

佐倉宗五郎の靈堂は、少しけば／＼しすぎてゐると思つた。あの人の性格にしつくり合



つたものが作りた。

□お出迎へ

八月四日午後五時半、私達は一同無事池袋についた。日暮里までお出迎へて下さった方もあつた。

「もつと居たいな」と云つてゐた子供達も、お母さん達に出合ふとさすがに嬉しうにこくしてゐた。

池袋で、一年の中村君や、二年の小野さんが一人で出迎へてくれてゐたのはうれしかつた。——(大正一四・八・二三)——

昭和貳年十月七日 印刷 文化中心 新教授學大系 第四卷 國語新教授法下 定價 金壹圓五拾錢

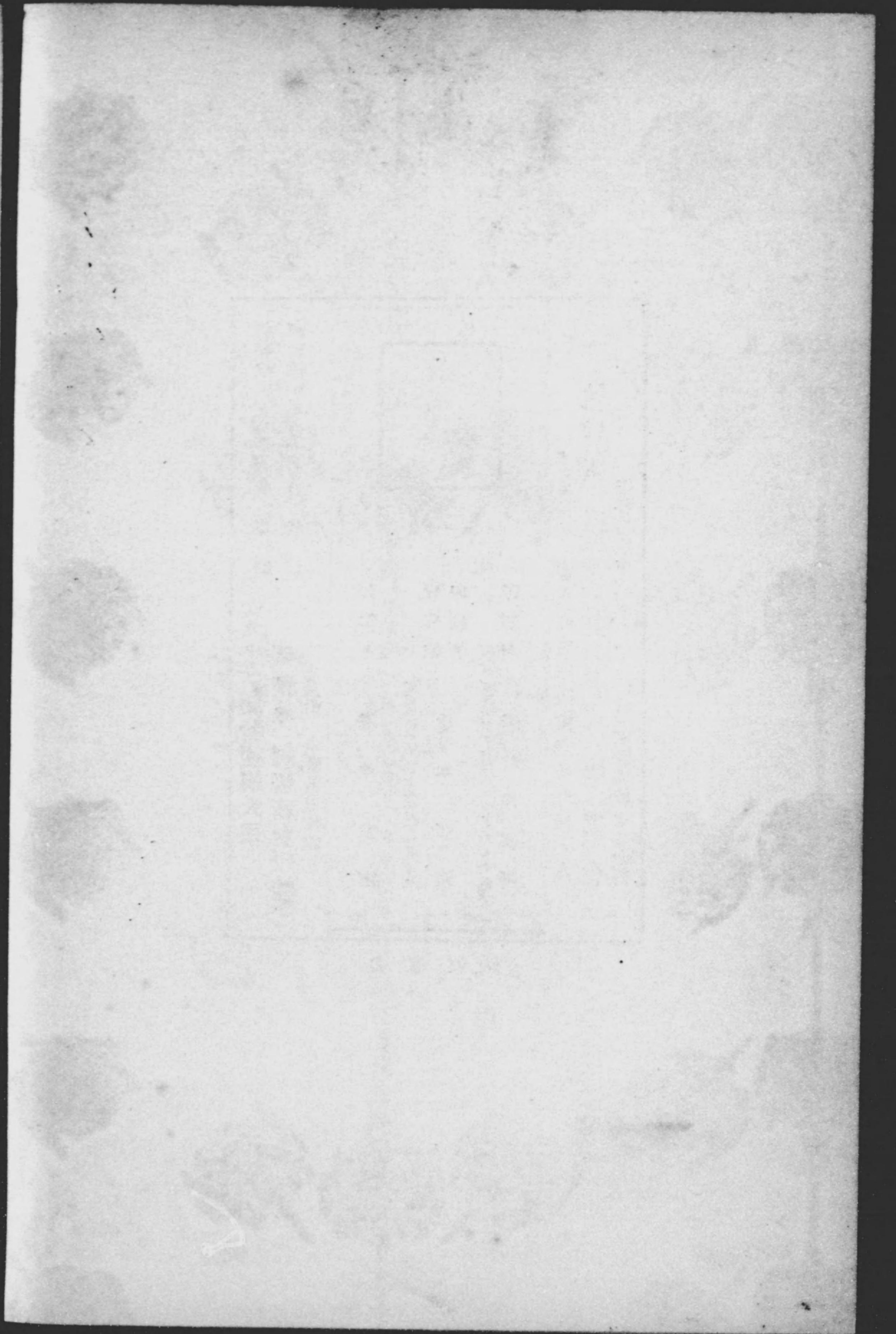
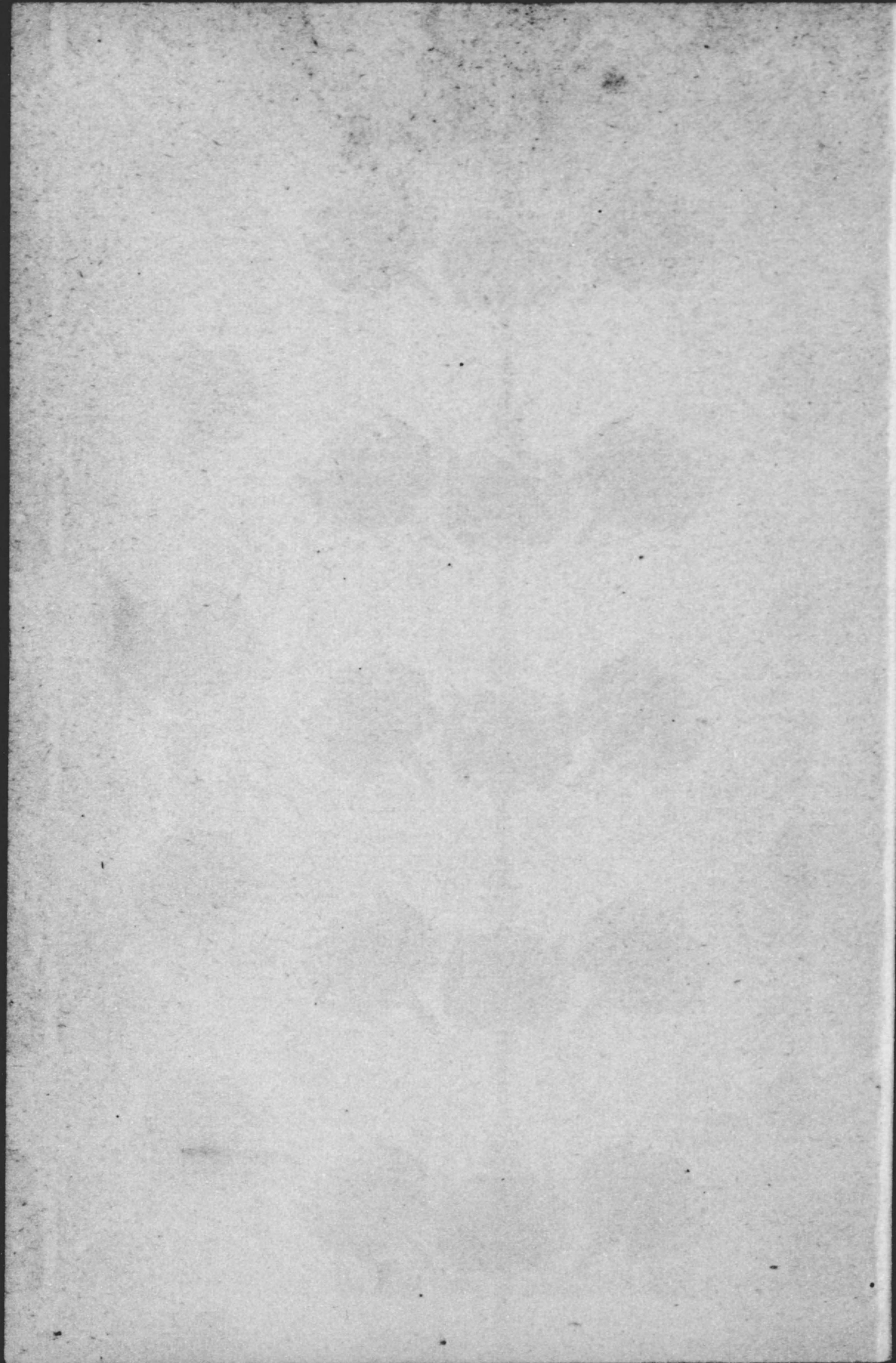


著作者 峯地光重  
發行兼印刷者 辻本經藏  
印刷所 東京府下藤合町四ノ一五五七番地 溝口印刷所

發行所 東京市麴町區富士見町五ノ九 教育研究會  
振替口座東京五八一八〇番・電話九段七二七番

(本製津大)







259  
99

